

いずれも大きくて、閲覧には不自由な思いをするものであるが、机上で複製図を広げることができることはまことに有り難い。ただ欲をいえば、収録された複製図と図版の各個に題目と所蔵先が記されているものの、図幅の大きさは示されていないので、それがあれば一々頁をめくる手間が省けてより便利であると思われる。

酒井家文庫所蔵の若狭国の正保国絵図は従来、元禄国絵図と誤認されていたが、その誤認の原因と、これが正保2年に幕府へ提出した国絵図の写しである証拠が解題では詳しく解説されている。また、幕府撰以外の国絵図についても若狭国の輪郭によって4種類に分類し、そのうちの代表的なものが1点ずつ複製の対象となっている。

小浜は寛永11(1634)年以来、酒井氏若狭藩の城下町であったことから、小浜の城下絵図は酒井家文庫を中心に多数の現存が確認されている。そのため、城下絵図は複製図と図版を合わせて20点をも収録し、本書の中心的部分となっている。それらの城下絵図を図示内容から5つの類型に分けて、未収録図をも視野に入れての綿密な解説がなされている。

また、若狭国は北に若狭湾と日本海をひかえて、古来、漁業の盛んな地域であった。近世にも、リアス海岸で耕地に恵まれない本地域では漁業に依存して生活する人たちが多く、浦々間で漁場の境界取決めや、その境界をめぐる争いなどがあって、「漁場図」と総称されるような近世絵図が地元で数多く残されている。そのような漁場図9点を図版にて収録しているのも、地域とかかわる本書の特色であろう。

県史や市史の絵図地図資料編であれば、収録する資料個々の全体像と図示・記載内容が判読できるような収録の仕方が最も大切な要件である。次にはその要件を満たしながら、できるだけ扱いやすいような工夫が要求される。本書はまさしくそのような要件を満たし、利用者の要求に応える待望の絵図地図資料編である。高い評価を受けている既刊の『福井県史』とともに、学術的に極めてレベルの高い編纂物として、本書の編集・執筆を担当された関係者に深く敬意を表したい。

(川村 博忠)

矢ヶ崎 典隆 著：

『移民農業——カリフォルニアの日本人移民社会』

古今書院 1993年10月

A5判 319ページ 7,400円

今日、カリフォルニア州は約83,000農場と約850万エーカーの灌漑農地で、250種類以上の作物を栽培している。この多種類の作物栽培によるカリフォルニア州の農業生産性は、過去44年間、アメリカ合衆国50州の中で、その生産額と収入額において第1位の座を確保し続けており、さらに1991年の農業生産額においては、州の20位までの農畜産物のうち、12品目が合衆国で第1位、5品目が第2位を占めるように、その生産性の高さに極めて大きな特徴を見せている。本書の話題で日本人移民が中心的農業に据えた園芸農業の野菜や花卉も、この20位以内の中に位置づけられ、そして現在、これらの出荷・販売は州や国内市場だけでなく、外国市場にも強い影響力を持つなど、これらの栽培・生産と生産性の高さも注目されている。

日本の伝統的農業の精神を強く受け取ったまま渡米した多くの日本人移民は、新天地・新世界への希望よりも不安を抱えたまま、最初は借地で、そして小規模な自作地で農業経営を始めた。当然、この農業は家族労働力を駆使しても、生きるために想像を絶するものであったことは言うに及ばない。日本人移民は試行錯誤の連続から、小規模でも集約的な農業経営の方向性を野菜や花卉農業に託し、異国での生活に労苦を重ねながら、また多くの挫折を味わいながら、新進気鋭の精神力で自らの農業経営の中心として積極的にかかわった。その後、農業経営者の増加と規模拡大の過程で、彼らは生産組合を結成し、さらに、青果物の流通や金融組織の組織化と活動にも、その才を発揮していった。しかしながら、第二次世界大戦による強制収容は、日本人農業の継続を中断させることになり、このことは戦後における彼らの農業経営存続に大きな陰を投げかけることにもなった。このように本書は、日本人移民が想像を絶する苦労を経験しながらも、異国において農業とかかわり、農業経営を導入し、存続、挫折、そして再編するという過程を時系列的に報告している。

本書の特徴は、カリフォルニア農業が穀物栽培から集約的農業に移行していく中で、日本人移民がこの発展に大きくかかわった様相を、多くの資料と事例研究を通じて、極めて詳細に分析している点にあ

る。また、従来まで移民農業の研究が中国人移民やヨーロッパ系移民に焦点が当てられてきたが、それまで断片的にしか報告されていない日本人移民の農業と農業活動を、精緻な研究を通じて、その特徴と意義について体系的にまとめられた点にもある。さらに、本書はカリフォルニアの農業発展の側面に、日本人移民がかかわった様相を歴史地理学的視点からアプローチしたものであるが、同時に「マイノリティ」問題を課題にした文化地理学や民族地理学の研究でもあるという特徴も兼ね備えている。

本書の構成と内容について、簡単に紹介する。

本書は序章と第Ⅰ部(第1章～第3章)、第Ⅱ部(第4章、第5章)、第Ⅲ部(第6章)、第Ⅳ部(第7章、第8章)の構成内容になっている。また、第Ⅰ部から第Ⅲ部までは第二次世界大戦前の日本人社会を対象とし、第Ⅳ部は戦時中から戦後にかけての日本人農業の変貌を取り扱っている。

序章では、移民農業の地理学研究を簡潔に展望するとともに、カリフォルニア農業の発展過程にかかわった日本人一世や二世の日系社会と日本人農業を位置づけている。次に事例研究の内容である。第Ⅰ部は「野菜と日本人——生産と流通における垂直的統合——」という視点で、日本人移民農業の展開と、農業経営の主力となった青果物の生産から流通までの垂直的支配構造について考察している。これらの問題を第1章では、南カリフォルニアにおける日本人移民農業の展開過程を、日本人の農業労働期、日本人農業の形成期、発展期、安定成熟期という4つの時期に区分し考察している。第2章では、南カリフォルニアの日本人農業組合を取り上げ、日本人農業の発展を確固とした農業組合活動の性格と変化を通じ、民族的な結合性、社会的経済的背景から検討している。第3章では、ロサンジェルス市の青果物流通と日本人について、青果物市場における卸売活動と果菜店などの小売活動に従事した日本人の、生産から流通までの民族的系列構造の特徴について分析している。

第Ⅱ部は「花卉と日本人——民族産業の発展——」という視点で、日本人による花卉産業の形成過程と、民族的な花卉市場の産業構造について考察している。この問題を、第4章のサンフランシスコ湾岸地域における日本人の花卉産業と、第5章のロサンジェルス地域における日本人の花卉産業の2つの地域で研究を行っており、この中から共通点と相違点など

について検討している。

第Ⅲ部は「金融と日本人——移民社会の民族的適応戦略——」という視点で、農業や移民の経済的活動基盤としての金融の問題を、制度的金融組織、民族的庶民金融組織、ディーラークレジットなどの意義から、日本人移民社会が持っていた特徴について、第6章で具体的に論じている。

第Ⅳ部は「中断と変貌——第二次世界大戦中と戦後の日本人農業——」という視点で、戦時中から戦後にかけての日本人農業の変貌を分析している。これらの問題を、第7章の「強制収容と日本人農業」では、強制収容による農業活動の中断とこれによる日系農業社会の変化、第8章の「民族産業としての花卉栽培業の変貌」では、強制収容により青果物の生産・流通の回復が遅れたのに対し、戦後になっても高い発展を成し遂げている花卉産業について詳細に分析している。

1990年に勤務校の海外派遣研究員として、評者は1年間カリフォルニアに滞在しながら研究生活した際、セントラルバレーを中心に、農業地域と作物の栽培景観に興味深く観察・研究した。研究の過程で、私自身も多くの日系人一世・二世の人々と出会い、農業経営のこと、日系人社会のこと、アメリカやカリフォルニア社会のことなどを、日本人的な感覚で、時にはアメリカ人的な感覚で教えていただいた。そして、本書と出会った。今まで、日系人の人と社会を薄っぺらな理解の上で試行を重ねていた者からすると、日本人移民としての歴史の重さ、生産性の高いカリフォルニア農業の発展に、日本人たちが一翼を担った意義と役割を、本書によって総合的・体系的に興味深く認識することができた。

ただ、欲をいえば、著者も指摘しているように、事例研究がサンフランシスコ湾岸地域とロサンジェルス地域のみ限定されていることから、必ずしもカリフォルニアにおける日本人移民農業の全体像が明らかにされていない。また、極めて市場性の高い特殊な作物であるが故に、生産性は高いが、栽培・生産地域の空間的広がりには小さい。確かに、カリフォルニアの農業は園芸農業の比重を拡大しつつあるが、まだ圧倒的に園芸農業以外の農畜産物の栽培・生産が広大な空間を占有しており、この分野の農業にも多くの日系人が積極的にかかわってきたし、今でもかかわっている。この意味から、カリフォルニアの農業と農業地域の形成に、さらに日系人が大きな役

割を果たしているので、日系人農業についてさらなる事例研究の蓄積が必要である。また、この事例研究を踏まえて、まだ必ずしも明らかになっていないカリフォルニア農業と農業地域の地域の特徴、農業地域区分などについて、地域研究が待たれるところである。

本書は、著者がカリフォルニア大学・パークリー校への長期留学時の研究成果としてまとめられた労作である。ぜひ、一読願えば幸いである。

(水嶋 一雄)

西村 幸夫 著：

「歴史を生かしたまちづくり——英国シビック・デザイン運動から——」

古今書院 1993年8月

A 5判 170ページ 2,200円

本書のサブタイトルとなっているシビック・デザインという用語は、まだ日本ではなじみが薄いのではなかろうか。イギリスでは古くから地域の環境保全運動が盛んである。古い都市景観や史跡、自然景観などの保全のためにナショナルトラストが組織されており、また各地の都市の生活環境の保全と改善を目的とした市民の自発的運動組織としてローカル・アメニティ・ソサエティがある。特定の物件の保全だけでなく、都市の生活環境を全体的に考え、その保全と改善を目指して市民みずから行なう町づくり運動がシビック・デザイン運動であり、このような各地の団体の全国的組織がシビック・トラストであって、1957年に設立された。

本書はイギリスの各地で展開されている町づくり運動について、著者がみずから現地を訪問し、関係者にインタビューし、その実態に触れた記録であるとともに、イギリスにおける町づくり運動の歴史やその特徴が全国的な規模で把握できるようにまとめられている。

本書は次の7章から成る。

1. 英国シビック・デザイン運動のあゆみ
2. エセックス州ハリッジ／多様な活動、ゆるやかな連繋
3. デボン州シドモス／英国最古のローカル・アメニティ・ソサエティ
4. ノーフォーク州ノリッジ／オグドンおばさんの休暇
5. ダービーシャー州ワークスワース／再生した

過疎のまち

6. シュロップシャー州アイアンブリッジ／環境の教育力

7. イギリスから日本のまちづくりを展望する

第1章は表題の通り、シビック・デザイン運動の略史であるが、町づくりとか都市計画といわれるものが、専門家主導で行なわれてきた時代から脱して、市民が地方行政当局と協力して町づくりの基本方針や具体案の検討に参画するようになった過程が述べられる。とくにイギリスにおけるボランティア観がどのようにして成立したのかというプロセスや、ボランティア活動を支える公的な補助金の制度に関する記述は貴重である。

第2章から第6章までは、著者が実際に探訪した町づくり運動についての具体例である。いずれも一般の日本人にはなじみの薄い町が多いが、各章の冒頭のカットにイギリスのなかでの町の位置を示す略図が掲げられている。ノリッジのように町そのものが人口12万人という中都市であり、歴史的にも著名なものや、古くから港町として繁栄していたハリッジのような例もあるが、ワークスワースとなると、すぐに位置を指摘できる日本人は極めて少ないのではなかろうか。ここで述べられていることは、それぞれの町のソサエティがどのようにして町づくりを進めてきたかという物語であり、すべてがうまくいったものばかりではない。また、ソサエティ運営と町づくり運動の中心となってボランティア活動を長年にわたって続けている人物のキャラクターが生き生きと描かれている。

何の変哲もないような小さな町や村にも、それぞれ固有の環境があり、固有の歴史がある。多くのソサエティの活動は、市民たちの自分の町に対する関心からはじまった。それは郷土史であったり、博物学、建築、民芸であったりする。たとえば、港町ハリッジのソサエティは、博物学、建築、郷土史、海事博物館運営、遊歩道、樹木、アクション(保存キャンペーンや募金活動)の7グループより成っていて、これらのグループが連繋して一つの町のソサエティをつくっている。このような関心のなかで、歴史的建造物や町並みなどの歴史的環境の保全や修復がとりあげられる。また、こわれたままの公衆電話を調査して、その結果を電話会社に知らせ、改善を要求するといった地道な生活環境の改善もソサエティは手がけていることが述べられる。